

楚系文字を素材とした作品制作―郭店楚墓竹簡を中心に―

中村 拓也(大 郁)

Takuya (Taiku) Nakamura

長江中流域の北側に位置する湖北省は、春秋戦国時期には楚国の中心地区として繁栄した古代楚文化発祥の地であり、気候は亜熱帯に属する湿潤な土地で、江陵・襄樊・武漢・隋州・鐘祥などの歴史的都市を有した地域である。

一九九三年には荆門市郭店村で郭店楚墓竹簡が出土された。竹簡は八〇四枚、有字簡は七三〇枚にのぼり、内容は戦国時代の典籍一八編の写本であり主として道家と儒家の書籍であった。その他にも副葬品として漆器、陶器、竹器、方形銅鏡などの銅器、七弦琴なども発掘された。

竹簡の書体は、当時楚国で通行していた円転を主とするやや縦長の結体をしたいわゆる楚系文字と呼ばれるもので、その書法的な部分が優れていることから、専門の書写集団によって写されたと考えられている。

ここで、楚系文字を制作の素材として扱う際に文字の正確性に注

意することが必要となってくるのである。書写集団とはいえ文字の書き手の癖や間違いによる文字の変化が見られるのである。例として文字の中には無義的に線の繁化を行ったもの、点画の連続や省略による簡略化、偏旁などの写し間違えによる異体字等様々である。

漢詩や語句を創作しようと試みた際にはこういった間違った文字を使用しないよう正確に書くということがその文字を更に知ることにつながっていくのである。今作は「福應」の二文字を楚系文字の書風にて書き上げた。楚の特徴的な部分を今一步作品に表出出来なかったように感じられ今後の課題としていきたい。



福
應

34.5×44.8cm